(51)豊臣氏城内武家屋敷跡　中央区北浜東（大阪府立労働センター内）

☞昨年の大阪龍馬会の総会はここ労働センターで開かれていますが、

「ここに武家屋敷跡の説明板が建物の外にあります。説明文は「労働センター南館」の建設に先立ち、昭和６２年(1987)８月から１１月にかけ、桃山時代（１６世紀）に築造された豊臣秀吉による大坂城跡の発掘調査を実施した。この地域は、大坂城の惣構内に位 置し有力大名の屋敷があったと推測されていた。調査の結果、元和元年(1615)大坂夏の陣で焼失した武家屋敷の遺構が検出された 。門の岩石とそれに続く築地塀基部の石垣は規模構造ともにすぐれ 有力大名の外構施設に足るものである。また、それらは現在の道路と同一方向で、当時の地割を考えるために貴重である。そこで、検出された遺構をボルティコの一部とし、地上に移設、保存活用することにした。（但し、位置は、建物との関係で若干移動している）また出土品はロビーで展示している。なお、出土した鬼瓦に桔梗紋が使われているの で、この屋敷の主を桔梗門を家紋とする加藤清正あるいはその関係者と見られる。」

とあります。

ロビーに展示されている出土品

耳かき

唐津碗　　塩壺

朝鮮唐津徳利
李朝白碗皿

(52)熊野かいどう跡　中央区天満橋京町

☞碑文には『熊野街道は、このあたりを起点にして熊野山に至る道である。
京から淀川を船でくだりこの地で上陸、上町台地の西側 脊梁にあたる御祓筋を通行したものと考えられ平安時代中期から鎌倉時代にかけては「蟻の熊野詣」といわれる情景がつづいた。
また、江戸時代には京・大坂間を結ぶ三十石船で八軒家の船宿があったことから「八軒家」の地名が生まれたという。』
と書かれている。

(53)小楠公義戦之跡碑　中央区天満橋京町

☞楠木正成の子正行が正平２年(1347)１１月、山名時氏、細川顕氏の軍と戦い快勝したが、敵兵５００数名を助けた。その話が明治時代にはいり欧米人が聞いた時、非常に感銘を受けたといいます。
楠木正行は正平３年(1348)四条畷の合戦で戦死します。

(54)贈正四位　謹皇僧　月性（げっしょう）寓居跡　中央区島町2丁目（長光寺）

☞浄土真宗西本願寺派の長光寺前に『維新史跡 贈正四位 僧 月性 龍護遺跡 長光寺』と書かれた石碑が建っています。

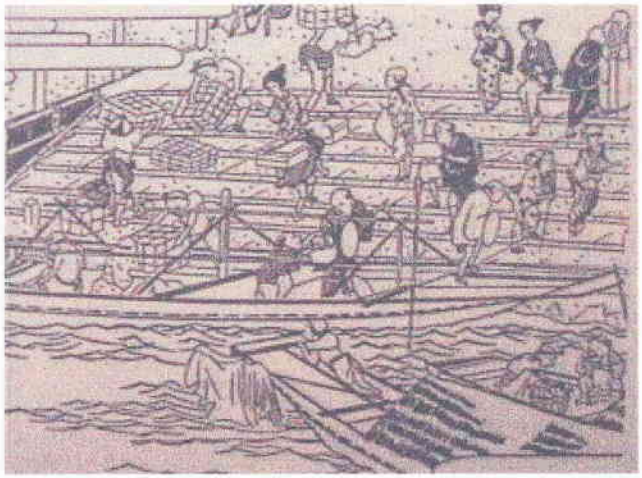
謹皇僧 月性は謹皇僧 月照とはまったくの別人になります。月性は文化４年(1817)周防国玖珂郡遠崎にある浄土真宗西本願寺派の光福寺で、僧侶の子として生まれました。早くから京で僧侶の勉強を始め、江戸、京畿、長崎などで遊学しました。２５歳に西洋文明に目覚め、自分の活躍の場を京畿と決め、叔父に当たるここ長光寺の住職　龍護を頼って来坂します。
当時尼崎町で梅花社を開いていた儒学第一人者(29)で紹介した篠崎小竹に入門します。ペリー来航以来いちはやく攘夷論を唱え、海防論を編纂し長州藩福原越後(元治元年禁門の責任を負い切腹)に上申して認められています。
その縁で、吉田松陰とも親交を重ねます。
匿っている長光寺の龍護和尚も理解がありました。
在坂中に著した「仏法護国論」が西本願寺第２０世法主広如上人に認められ、京での逗留が許されます。在京の梅田雲浜、梁川星巌らと尊王攘夷運動に奔走しました。
しかし、安政の大獄以降は、あらゆる同志が捕まっていく中、郷里の周防に潜行しますが、病にかかり入寂します。
月性の果たせなかったことを長州の桂小五郎、久坂玄瑞、高杉晋作と引き継がれていきます。

ここ長光寺に、親交の深かった梅田雲浜や吉田松陰が来泊したという話も残っておりある本には坂本龍馬が来泊したと書いている本もあります。
龍馬も大坂には何度となく来ていますが、寓居先などがはっきりとわかっているところが少なく今後新たな資料が発見されることを期待しています。

長光寺と縁はありませんが、もうひとりの僧 月照は、西郷隆盛とともに鹿児島の錦江湾に入水自殺をしますが、生誕の地は大坂で、今は現存しませんが、中央区平野３丁目あたりにあった仏光寺別院にて生まれています。淡路町にあった広瀬旭荘の塾に学んでいます。

(55)八軒家船着き場跡　中央区天満橋京町（永田屋昆布店前）

☞京･大坂間の水上交通であった三十石船の発着場の拠点として、京の伏見と大坂の八軒家がありました。三十石船は幕府公認の船で、定員が２８人、船頭が４人でした。
名の由来ですが、川に沿って家が八軒あったことから「八軒家」と呼ばれたのであって船宿が八軒あったのではないようです。明治４３年、京阪電車の開通により船と船宿（１１軒あったそうです）が消えてしまいました。
この八軒家には、数多くの幕末の志士が通っているはずです。
司馬遼太郎の「竜馬がゆく」でも頻繁に登場します。
新選組が定宿にしていた「京屋忠兵衛」という船宿もこのあたりにありました。



(54)贈正四位　謹皇僧　月性(げっしょう)寓居跡　中央区島町2丁目（長光寺）

☞浄土真宗西本願寺派の長光寺前に『維新史跡 贈正四位 僧 月性 龍護遺跡 長光寺』と書かれた石碑が建っています。

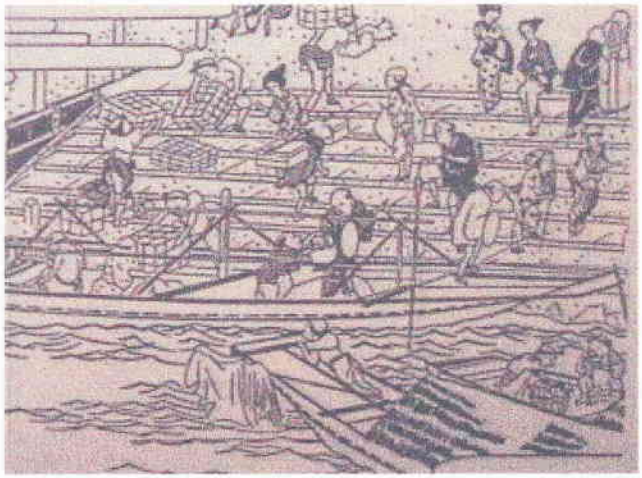
謹皇僧 月性は謹皇僧 月照とはまったくの別人になります。月性は文化４年(1817)周防国玖珂郡遠崎にある浄土真宗西本願寺派の光福寺で、僧侶の子として生まれました。早くから京で僧侶の勉強を始め、江戸、京畿、長崎などで遊学しました。２５歳に西洋文明に目覚め、自分の活躍の場を京畿と決め、叔父に当たるここ長光寺の住職　龍護を頼って来坂します。
当時尼崎町で梅花社を開いていた儒学第一人者(29)で紹介した篠崎小竹に入門します。ペリー来航以来いちはやく攘夷論を唱え、海防論を編纂し長州藩福原越後(元治元年禁門の責任を負い切腹)に上申して認められています。
その縁で、吉田松陰とも親交を重ねます。
匿っている長光寺の龍護和尚も理解がありました。
在坂中に著した「仏法護国論」が西本願寺第２０世法主広如上人に認められ、京での逗留が許されます。在京の梅田雲浜、梁川星巌らと尊王攘夷運動に奔走しました。
しかし、安政の大獄以降は、あらゆる同志が捕まっていく中、郷里の周防に潜行しますが、病にかかり入寂します。
月性の果たせなかったことを長州の桂小五郎、久坂玄瑞、高杉晋作と引き継がれていきます。

ここ長光寺に、親交の深かった梅田雲浜や吉田松陰が来泊したという話も残っておりある本には坂本龍馬が来泊したと書いている本もあります。
龍馬も大坂には何度となく来ていますが、寓居先などがはっきりとわかっているところが少なく今後新たな資料が発見されることを期待しています。

長光寺と縁はありませんが、もうひとりの僧 月照は、西郷隆盛とともに鹿児島の錦江湾に入水自殺をしますが、生誕の地は大坂で、今は現存しませんが、中央区平野３丁目あたりにあった仏光寺別院にて生まれています。淡路町にあった広瀬旭荘の塾に学んでいます。

(55)八軒家船着き場跡　中央区天満橋京町（永田屋昆布店前）

☞京･大坂間の水上交通であった三十石船の発着場の拠点として、京の伏見と大坂の八軒家がありました。三十石船は幕府公認の船で、定員が２８人、船頭が４人でした。
名の由来ですが、川に沿って家が八軒あったことから「八軒家」と呼ばれたのであって船宿が八軒あったのではないようです。明治４３年、京阪電車の開通により船と船宿（１１軒あったそうです）が消えてしまいました。
この八軒家には、数多くの幕末の志士が通っているはずです。
司馬遼太郎の「竜馬がゆく」でも頻繁に登場します。
新選組が定宿にしていた「京屋忠兵衛」という船宿もこのあたりにありました。



(61) ー 幕末の大坂城 ー　　大阪城内

(62) １４代将軍 徳川家茂（とくがわいえもち） 終焉の地

(63) １５代将軍 徳川慶喜（とくがわよしのぶ） 各国公使謁見の場所跡

☞本日最後の史跡です。大変お疲れ様でした。最後に大阪城を御案内します。ただし、今日は幕末期の大坂城のみをご紹介します。（その他の時代については会報78号を参照ください。）

幕府が列強に圧され開国に踏み切ると各地で尊皇攘夷が激化し、孝明天皇から幕府に対し攘夷の実行を迫るようになりました。そのため、１４代将軍徳川家茂が文久３年(1863)３月４日に、３代将軍徳川家光以来２３０年ぶりに、上洛をし「攘夷実行期限を５月１５日」と約束させられることになります。そして京を去った家茂は、これも家光以来となる大坂城入城を果たします。（文久３年４月２１日）勝海舟日記では『(徳川)京橋口御船着場まで 御迎えの為参上。夜五ツ時、(家茂が)御船着、御入城、(勝が)深夜退出。』とあります。余談ですが、家茂が摂海沿岸を順動丸にて巡覧の折、海舟が海軍操練所開設の提言をしたのですが、即その場で許可されるのが、その２日後４月２３日です。家茂は６月１３日大坂を発ち順動丸で江戸に帰ります。

２回目の来坂は翌年 文久４年(1864)正月８日です。この時、全８隻の艦隊を率いて海路で来ました。家茂は翔鶴丸に乗船。品川出帆は１２月２８日ですので、将軍が元旦を迎えたのは下田の滞泊先 海善寺だったようで、船旅の途中で迎えるという異例の日程でした。正月１４日には上京。５月７日に大坂城へ帰城。１６日天保山から海路にて江戸へ帰ります。３回目の大坂入城は慶応元年(1865) 閏５月２５日。

第２次長州征伐の総指揮のためです。今回は上京が目的ではなく、すぐに姫路城へ向かう予定が、朝廷から征長の許しがおりず、長期滞在となります。結果、将軍の大坂滞在が、この年の天神祭の船渡御が中止となるなど大坂の町民に不評を買います。

慶応２年(1866)６月７日ようやく戦端が切られますが、家茂は７月２０日大坂城中でで病没します。僅か２１歳でした。新将軍となった徳川慶喜に対し各国公使との謁見の場所が大坂城と決まり、慶応３年２５日より４月１日まで行われました。謁見の間は、本丸御殿の中の御白書院です。（今は現存せず）

この場で慶喜は「兵庫開港、大坂開市は期日通り実現する」と約束します。またイギリスは大広間前の広場にて、慶喜に対し騎馬護衛兵の調練を披露します。

さて、大政奉還、王政復古の大号令と急展開し、慶喜は慶応３年(1867)１２月１３日京の二条城より大坂城へ入ります。その時の模様をたまたま大坂に来ていたイギリスのアーネスト・サトウが目撃し日記に残しています。

『騎馬の一隊が近づいてきて日本人は皆ひざまずいた。一橋（慶喜）と彼に従う人々であった。我々はこの転落した偉人に脱帽した。彼は黒い頭巾で顔をつつみ軍帽をかぶっていた。その顔はやつれていて悲しげに見えた。』とあります。慶応４年(1868)正月３日から始まった鳥羽伏見の戦いで敗戦し慶喜は朝敵となります。そして大坂城を抜け出すのは６日の夜です。翌日７日には朝廷より慶喜追討令が出されます。新政府軍は９日には京橋口に到着するも大坂城内から不審火が起こり、たちまち燃え広がり２日間火が止まらず大坂城は焼失してしまいます。この焼け跡を見たアーネスト・サトウが日記に『(1月23日)門を通り過ぎるとあたり一面荒涼たる景色であった。内濠のところの櫓と壁はなくなっていた。(徳)ここにかつて建物があったことを示すのは崩れた瓦で覆われた平らな地面だけであった。』と書き残しています。

その後、明治新政府は、大村益次郎の案を採用し、この地を日本陸軍の中心地として様々な施設が建てられていくことになります。

石山本願寺の炎上を含め織田信長、徳川幕府、明治新政府といずれも強固な政権を獲得するのにこの大坂城炎上は大きなきっかけとなっています。

徳川慶喜・パークスとの会見